

発達障害の子が通う放課後施設

映画では、子供たちがスタッフの指導を受けながら、キャンプで料理をする場面も(宮崎さん提供)



心の成長 見つめた3年

発達障害を持つ子供たちが集まる江東区内の通所施設を舞台に、子供たちの成長と、それを見守る大人たちを追ったドキュメンタリー映画「世界一すてきな僕たち私たちへ」が完成した。約3年におよぶ取材で、撮影時間は約1000時間。8月に江東区文化センターで上映されるほか、有料で自主上映会の実施も受け付けている。監督を務めた宮崎信恵さん(70)は「子供たちの体と心が成長していく様子を見てほしい」と話している。

ドキュメンタリー 江東で8月上映会



「こびあは子供の発達に欠かせない場と感じた」と話す宮崎さん

制作は、宮崎さんが社長を務める映像制作会社「ピイス・クリエイト」(江東区)。働く親のニーズに込めようと1995年に開設された同区内の放課後等デイサービス事業所「こびあクラブ」が舞台で、NPO法人が運営している。宮崎さんは、健常者と隔てられがちな障害者の現状を伝えたいと、4年前に制作した前作で、福岡県の福祉作業所を取り上げた。その試写会にこびあクラブの関係者が訪れたことがきっかけで、宮崎さんは発達障害児が放課後に通う施設があることを知ったといい、「障害がある子供たちの内

面をもっと伝えたい」と取材を始めた。江東区内に2か所あるこびあクラブの施設には、小学1年から高校3年までの発達障害の子供たち約70人が通っている。映画では、親と離れる不安から、出かける母親にしがみついたり叫ぶ中学生の少年や、登った木の枝から飛び降りるかどうか、20分近くも葛藤を続ける少年など、クラブに通う子供たちの様々な表情が収められている。また、子供たちだけではなく、献身的に子供たちに向き合い、食事を作ったり一緒に風呂に入ったたりす

るスタッフの姿、悩みながらもスタッフやほかの子供の親たちに支えられて前向きになっていく親など、周囲の人たちにもカメラは向けられた。宮崎さんは撮影を通じて、「こびあの子供たちは自分の言葉ではうまく表現できないけれど、豊かな感情がある」といい、「障害があっても、それまでの自分を超えたいとの葛藤があ

り、それを超えて成長していくのは健常者と変わらない」と話している。8月5日に行われる江東区文化センターの上映会は、前売り券が大人・大学生1000円、中学生や障害を持つ人は500円。ピイス・クリエイトは自主上映会を実施する団体などを募集している。問い合わせは同社(03・3699・4883)。